

ながら、一方的に自然を破壊し、その事業は取捨つかない事態に追い込まれてしまう。現在両浦に於ける上水道や漁産の危機は根本的に見て、湖水の自然条件を理解し得ないからであり、従って計画がござんとなり、その進捗状況において主客転倒するに至つてある。例を挙げれば周囲から流入している大小河川(三四)や都市下水道の浄化なくしての「水ガメ化」は絶対あり得ない。

また、高浜入干拓に就て見ると、利水目的とは全く相反しており、公正な立場から批判するならば、まず必要がなく、ゴルフ場などを飽和状態になるまで許可しておる今日、なを好んで此処に耕地を造る必要があるのか了解に苦しむ。高浜入江は、総合利水計画にはなくてはならない水域であり、水の需要が激増して来て、その水資源をどこに求めるかに汲々としている時代に、一つの屋根の下(霞ヶ浦)での干拓は速かに中止すべきであり、すでにこの干拓の造成時代は過ぎ去つてゐる。

◇ 鯉の大量死に想ふ ◇

小割式飼育漁業とは、一定の網生け簀内で鯉を飼育することであり、これは採る漁業から飼育漁業へと、湖水の水ガメ化に対応して、県当局の奨励、助成指導のもとに発展してきた。この施設は霞ヶ浦、北浦で三千統、その生産高は三千トン、飼育種は「ペレット」等を主体と

した合性剤であり、此処に昭和四十八年夏洪水期に鯉の大量死が発生した。この頃、常陸川水門の閉鎖がなかく続いていたので、その死因について県の天災説(不可抗力)と人災説(水門閉鎖)が対立した。これについてどちらの説が正しいか、主原因に対する「基本的な考え方は、

① 霞ヶ浦の水質悪化に伴う富栄養化とプランクトンの枯死沈澱による腐食

② ヘドロによる悪水の型成。

③ 濁水による水位低下。

④ 流入河川の水質汚濁。

などで、逆水門閉鎖とは無関係の立場を県側はとつた。

これに対し、漁民側は、水門が開いていれば問題は起らない。水位低下は濁水に加えて、日量二十万トンの工水を汲んでいるためだと主張し、平行線をたどつた。

これについてみると、常陸川のしじみの大量死因関連性が認められる。この時の範囲が一〇 Km 上流まで達しており、主因は水門閉鎖による自然条件の障害で、あとは枝葉の問題である。

次に小割式飼育のあり方であるが、湖水の異変に鯉が籠の鳥では対応することができない。③に飼育料による汚水。この三つに大量死の因がある。